

いるわけですから、この意味で、日常の学習指導における絶対評価は、たんに絶対評価というべきものではなくて、むしろ、「相対評価を加味した絶対評価」というべきものなのです。

以上、みてきましたように、絶対評価、相対評価は、それぞれ全く独立したものではなく、どちらの機能に重点を置くかによって、絶対評価、相対評価と呼んでいるにすぎないことがわかります。

したがって、絶対評価であるべきか、相対評価であるべきか、などの論争は、あまり意味のないものであることも、おわかりいただけたと思います。

22 到達度評価について知りたいのですが。

絶対評価は、教育目標である評価基準Aから、これを具体化した評価基準A'をつくり、このA'と個々の生徒の成績とを照合して、その達成の程度を判断する評価法でした。そして、この絶対評価の最大の短所は、このA'の作成についての一定の理論、方法がないということで、そのため教師の主観が大きく介入するというものでした。

そこで、この短所を補うために、教育目標である評価基準A'から、これを従来よりは、より細かに分析し、具体化した評価基準A''（これを到達目標といいます。）をつくり、さらに、A''の達成の程度を判断するための到達基準（例えば、ある到達目標に対してこの問題で、正答率85%以上は十分到達、60%から85%未満まではおおむね達成、などの基準）をできるだけ客観的に定めて、これと個々の生徒の成績を照合して、その到達度を判定しようという評価法が考え出されました。これが、到達度評価といわれるものです。

以上のことから、到達度評価は絶対評価であることがわかります。ところで到達基準は、基礎的な知識や技能に関する到達目標については、比較的设置しやすいのですが、高度の理解、思考、創造、表現等に関する到達目標になりますと、これに関する到達基準の設定は難しくなり、到達度評価にも、依然として評価の客観性、信頼性の問題が残ります。